

航空

航空情報隊

満州より本土防衛へ

山口県 河村直衛

私は山口市大字野下一六〇―一六で大正十年八月八日に生れ、長崎高等商業学校を卒業後、一か月ほど松下電器に就職、勤務しましたが、昭和十七年十月一日に臨時召集令状を受け、山口市の西部第四部隊補充隊に応召入営しました。当時両親、祖父共に健在で六人兄弟で兄は死亡していました。

初年兵教育は山口連隊の補充隊でした。教育期間の思い出は隣県との県境の島根県側津和野町への耐寒行

軍でした。この行軍は各大隊毎に実施され、陸士出身の青年士官青木中尉の計画設定で、連隊では前例のない苛酷な演習でした。一月末から二月にかけて一週間の計画でした。

鹿野では民家の土間、津和野では民宿、それ以外は期間中、宿泊なしの行程でした。夜間も歩き通しでした。背囊の後に付けた白布を目印に歩きました。疲れて休憩のとき、溝の白く光るのを路上と間違えて、水溜りに腰を下して、びしょ濡れになった事もありました。道も一般の道路を外れ、私道ばかりでした。隊の先導をつとめた見習士官が疲労のため死亡されたと聞きました。

入隊後四か月を経過した二月、幹部候補生に合格し、さらに二か月後、第九期甲種幹部候補生に選ばれた時

は、入隊後の色々な苦勞が、ここで一息に報われた喜びに感激しました。

五月十日に久留米第一陸軍予備士官学校へ入学しました。同校では第四中隊で「四は死に通じる」といわれて、校内随一の訓練の厳しい中隊でした。毎朝起床後、銃剣術で鍛えられ、演習で葉莢一つ亡失しても、広い演習場を這いずり廻されました。

別府の十文字原で、分隊戦闘射撃訓練の際、候補生が軽機の銃弾を浴びて死亡する事故が生ずるほどの厳しい訓練が行われました。

短期間に、多くの大切な兵の命を預かる隊長に仕上げねばならぬ。教官側としては、訓練にも自然と熱が入り、我々はよく殴られましたがよく耐えて、昭和十八年十二月、同校卒業の日を迎え、晴れの帯刀姿の見習士官になりました。

同時に意外な航空科への転属でした。私達幹候第九期卒業生中隊で百五十名の内、半数の七十四名が航空科へと転属となりました。この時期、陸軍の航空兵力の急激な増強に応ずる処置であったと思います。

転属先は第二航空情報隊と定まりましたが、防諜が徹底して一切が秘匿され、私達は朝鮮を通過し、安東で初めて任地が満州であることを知りました。

任地である東安省勃利県（旧三江省）杏樹にある第二航空情報隊へと追及しました。

第二航空情報隊は少佐が部隊長で、大隊程度の部隊である。杏樹に本部が位置し、各隊は国境に展開し、その間の指揮連絡は無線でした。特にハバロフスク正面の撫遠の監視分隊は、ソ連軍の重点と対峙していた関係上、航空情報も多繁を極めました。同地は凍土地帯で夏の解氷期は行動不自由でした。

同部隊に配属された我々見習士官は久留米、熊本、保定の各予備士官学校出身者三十数名の多数でした。この部隊の将校団の団結はかたく、また大変好意的に扱ってもらいました。下士官も気象関係の助教として温かく親切に我々に接してくれました。暗号教育は特別に部隊副官が教官として担当されました。

部隊は冬に備え、全員でトラックで付近の山で藪や食用になる野草等を採集したり、池を乾かして魚を捕

り、冷凍保存を計ったりしました。食卓に蛙の御馳走が出ることもありました。この部隊に少年航空兵第一期でノモンハンで敵地に不時着し自決出来ず、捕虜交換で帰隊後降等を受け、上等兵で勤務している兵がいました。非常に優秀な兵でしたが、酒が入ると昔を思い出すのか、荒れ出して、気の毒でした。

杏樹での通信演習には、付近の満人部落の望楼に数日間泊まり込み、無線通信の交信の練習を行いました。満人部落では小学校の先生の宅で、高商時代に学んだ支那語を試して見たところ、発音が奇麗だと誉めてくれました。私達の支那語の先生は、傳儀帝の親族に当る人で、北京官話の奇麗な人でした。

情報勤務者として、必須科目である通信教育の修得のため、吉林省公主嶺の第八〇〇部隊第一教育隊での集合教育で、二か月の期間、ピッチリ訓練を受けました。特に通信機器に対する取扱、理解力等の専門的な分野については、理工学部外（商学部）出身の私に取っては大変な苦勞でした。

昭和十九年六月に在滿六か月で仙台陸軍飛行学校に

分遣の命令を受け、裏朝鮮經由で再び内地を踏み、途中懐かしい山口連隊に立ち寄り旧友と再会を果たしました。

この飛行学校では通信、暗号の教育の外に電探の特殊教育も含まれ、そのために水戸の通信学校での再派遣教育も行われました。六か月で仙台に於ける教育を終了しました。

昭和十九年十二月、中部軍航空情報隊勤務を命ぜられ大阪へと転勤した。内地の情報隊は国境監視がない代わりに「防空監視哨」と直結した通信網により敵機来襲の情報を把握し、これを軍参謀部に伝達し、空襲警報の適確なる発令になるのです。防空司令部では女子挺身隊が徹夜で勤務している雄々しい姿も見受けました。

さらに昭和二十年一月に改編により、東海軍司令部参謀部通信係に勤務下命され、ここで航空軍を離れ一般部隊の所屬に復帰しました。勤務地は連日空襲、下の名古屋です。地下壕の物置小屋同然の所へ泊まり込みました。

終戦直前の四月、第五十三軍（断部隊）司令部通信班長を拜命しました。

軍司令官 赤 柴中将

参謀長 小野村少将

ここで軍用鳩の通信使用が重視されることとなりました。空襲時電源の損傷による通信網の補填に「伝書鳩」が重視されたわけであり、鳩は直ぐ人に馴れて可愛いものです。鳩は気流の関係か箱根上空は絶対に飛翔しないものと知りました。

小田急、伊勢原の奥地に陣地をかまえることになり、通信線構築に部下の人々が大変努力して頂いて助かりました。この部隊に勤務中、終戦を迎えましたが、特筆すべき事項は軍司令官赤柴中将の指令に基づく官民協力でありました。

地元住民の交通の便を図るため、軍の連絡用トラックに地元民間人の便乗を許可しました。ある日、将官旗を掲げた車に、地元老婆が手を挙げて同乗を求めたので、停車の上同乗してもらった等の微笑ましい風景も加わったものです。また、軍の事務室の筆生は地元

婦女子を優先採用しました。緊張の重なる終戦前の雰囲気には和やかな微風を漂わせる一瞬でもありました。

軍の方針樹立に当たっては地元鎌倉在住の知識人の参加を求め、その意見も十分尊重し、方策決定が行われました。終戦前の農家の労力不足を援助、協力する目的をもって、特に出征兵士の留守家庭を重点に農業の手伝いに兵を派遣しました。手伝いに向かう兵士にも農家出身も沢山いたので、懐かしい家郷を偲びつつ、家族的空気に包まれた一日は兵士の間で人気がありました。終戦時の軍需物資の配分も、地元の人々にも十分考慮を払った方法で行われました。

こうした一連の地元民に対する軍の配慮が、軍との摩擦や、誹謗等は一切受けることなく、行われたことは、「終戦」という悲惨な精神状況の下で唯一の慰めとなったのであります。

敗戦、復員、故郷の山口に帰還したのですが、それから、戦後の復興、祖国日本の再建という国民的大使命がありました。これが物心両面の極端な、貧困生活に耐えながら、我々復員軍人に課せられた、長い長

い戦であったのです。

通信部隊の裏方話

福岡県 長谷川 幡 尊

火の雲走る大陸の

空に聳える山幾重

汗と血潮にそめなて

行け山西の地の限り

昭和十八年一月、私が初年兵として現地入隊のため
広島に集結させられ、三日間広島に滞在後、夜行列車
にて広島駅から下関経由、関釜連絡船「金剛丸」船底
の三等船室に二百人位の兵隊がスシ詰め状態で押し
込まれ、エンジンの轟音で眠れぬ一夜を過ごした。

これで私も再び祖国の土が踏めなくなるのかと心の
底から母や弟に別れを告げつつも、再会を念じながら
遠く離れゆく祖国の灯が見えなくなるまで、真暗な玄
界の船上から永遠の別れを告げた。

翌朝、小雨の釜山に入港、付近の小学校で列車のく
るまでの一時を待機し、列車到着と共に釜山より乗車
出発した。この列車の中で初めて我々の行先が北支大
原電信第九連隊であることを知らされた。

冒頭の軍歌は我々を受領にきた古参兵の人達が教え
てくれた山西派遣軍の隊歌の一節である。私は歌が好
きであるためか、五十年経った今でも不思議に忘れる
ことなく、戦友会や何かの時に歌うが、一般の旧式軍
関係で北支にいた人でも知らない人が多く、他の人が
歌っているのも聞いたことがない。

いずれにしても真夜中に、鴨緑江の大橋を渡り、白
銀一色の満州の地に入った時は、なるようにしかなら
ないな気持ちで、運を天に任せる以外にはないと、
かえって気が楽になったような気持ちであったのも事
実である。

再び乗車二泊の後、早朝に大原に到着したように記
憶している、私は防寒服を装着していたが北支の寒気
は想像以上に厳しく、寒いというものではなく肌を刺
すように痛い寒さである。